

御霊宝虫弘大法会の砌

宗祖日蓮大聖人、『開目抄』にのたまわく、
「詮ずるところは天もすて給へ、諸難にもあえ、身命を期とせん。身子が六十劫の菩薩の行を退せし、乞眼の婆羅門の責めを堪へざるゆへ。久遠大通の者の三五の塵をふる、悪知識に値ふゆへなり。善に付け悪につけ法華経をすつるは地獄の業なるべし。大願を立てん。日本国の位をゆづらむ、法華経をすてゝ観経等について後生をごせよ。父母の首を刎ねん、念仏申さずば、なんどの種々の大難出来すとも、智者に我が義やぶられずば用ひじとなり。其の外の大難、風の前の塵なるべし。我日本の柱とならむ、我日本の眼目とならむ、我日本の大船とならむ等とちかいし願やぶるべからず」（御書五七二巻）（題目三唱）

本日は、恒例の総本山御霊宝虫弘大法会を奉修いたしましたところ、法華講大講頭・法華講連合会委員長・星野浩一郎氏をはじめ、代表の御信徒各位には多数御登山され、御報恩の法会を執り行うことができまして、まことに有り難く、厚く御礼申し上げます。

さて本夕は、ただいま拝読いたしました『開目抄』の御文について少々申し上げたいと存じます。

『開目抄』は、文永九（一二七二）年二月、宗祖日蓮大聖人が五十一歳の時、佐渡配流中に塚原でお認めあそばされ、四条金吾殿ほか門下一同に与えられた御書であります。

日蓮大聖人の御書五大部・十大部の一つで、『観心本尊抄』が末法に弘通される本門の本尊、なかんずく文底下種の法本尊開頭の書であるのに対して、『開目抄』は主師親三徳兼備の仏宝、末法正意の人本尊開頭の書とされている最重要御書であります。

ついては、総本山第二十六世日寛上人の『文段』に従って、当抄御述作の興起等について申し上げますと、大聖人は本抄に、

「日蓮といひし者は、去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ。此は魂魄佐土の国にいたりて、返る年の二月雪中にしるして、有縁の弟子へをくれば、をそろしくてをそろしからず。みん人、いかにをぢぬらむ。此は釈迦・多宝・十方の諸仏の未来日本国、当世をうつし給ふ明鏡なり。かたみともみるべし」（御書五六三巻）

と仰せられています。

すなわち、宗祖日蓮大聖人様は末法の法華経の行者にして、三徳有縁の御本仏であります。日本国にだれ一人として、日蓮大聖人が末法の御本仏であるとの深意を知らず、父母宿世の敵よりも強く憎み、謀反殺害の者よりも強く責め、あまつさえ文永八年九月十二日には、竜口において御命に及ぶ大難を被るも、大聖人を迫害誹謗した者は現罰を被ることもなく、また法華経の行者の守護を誓った諸天善神の加護もない状況下にあつて、弟子檀那のなかには疑心を生じて、大聖人が末法の法華経の行者であることを拝

信できず、大聖人が次々に難に値^あわれているのは、真の法華經の行者ではないのではないかとさえ疑う者も出てきたのであります。

そのため、かくなる疑いを断じて信を生ぜしめんがために、当世の明鏡として、また日蓮が形見として『開目抄』をお認めあそばされ、別しては四条金吾殿に賜われ、通じては有縁の弟子へ送られたのであります。

そこで、まず当抄の大意について申し上げますと、およそ当抄の大意は、末法下種の人の本尊を顕すこととあります。すなわち、宗祖日蓮大聖人の出世の御本懐は本門の本尊・本門の戒壇・本門の題目の三大秘法の御建立にあります。『三沢抄』に、

「又法門の事はさ^{佐渡}どの国へながされ候ひし已前の法門は、たゞ仏の爾前の經とをぼしめせ」(同 一二〇四^三)

と仰せの如く、佐渡以前においては、いまだその義を顕さず、佐渡以後に顕すといえども、なお当抄においては、いまだその名目もお顕しになっておりません。しかしながら、そのお心は常に三大秘法を顕されるころにあつて、まず当抄において末法下種の人の本尊を顕されたのであります。

故に、当抄の初めに主師親の三徳を尊^{そんぎょう}敬すべきを挙げ、次に儒・外^{じゅげ}に続いて内典^{ないでん}を積するなかに、まず一代の浅深を判じ、熟脱の三徳を顕し、次に大聖人は法華經の行者なることを明かし、終わりに至つてまさしく下種の三徳を顕され、

「日蓮は日本国の諸人に主師父母なり」(同五七七^三)

と御教示あそばされているのであります。すなわち、日蓮大聖人こそ寿量文底下種の、主師親三徳兼備の末法の御本仏であることを明かされているのであります。

次に当抄の題号について申せば、『開目抄』と題することは盲目を開くという意味であります。いわゆる、日本国の一切衆生が爾前権教に執われて真実の主師親三徳兼備の御本仏を見ることができず、盲目の如くであるため、一切衆生の盲目を開いて、真実の目を開かしめるために当抄を著し、『開目抄』と名づけたのであります。

『開目抄』の「開」すなわち、開くという文字には二意があつて、一には所除^{しよじよ}、二には所見であります。所除とは、権教に執着することを除くという意味であります。所見とは、主師親の三徳を見せしめるという意味であります。

また、妙楽大師は『文句記』に、

「発^{ほつ}とは開なり(中略)所除の辺に約して名づけて発迹^{ほつしゃく}と為す。所見の辺に約して名づけて発本と為す」(学林版文句会本上四二三^三)

と仰せられ、そもそも開には発迹顕本という意味があると判ぜられているのであります。

また、開目に対して、盲目とはいかなる人であるかについて四人を挙げて、一には外典の人、二には爾前^{だつちやく}の人、三には迹門の人、四には脱益の人であると明かされています。

外典の人々の盲目とは、ただ世間^{うい}有為の三徳に執して出世無為の三徳を見ず、故に盲目と名づけるのであります。

爾前の人々の盲目とは、ただ爾前権經の三徳に執して法華真実の三徳を見ず、故に盲目と名づけるのであります。

迹門の人々の盲目とは、ただ迹門^{じゆくやく}熟益の三徳に執して本門久遠の三徳を見ず、故に盲目と名づけるのであります。

脱益の人々の盲目とは、ただ文上脱益の三徳に執して文底下種の三徳を見ず、故に盲

目と名づけるのであります。

この盲目の人々の目を開かしめ、執着しているところの権教を取り除いて、真実の三徳を示されたのが『開目抄』であります。

すなわち、第一に、世間有為の三徳に執するを除いて出世無為の三徳を見せしめる故に『開目抄』と名づけ、二には、爾前権經の三徳に執するを除いて法華真実の三徳を見せしめるが故に『開目抄』と名づけ、三には(迹門熟益の三徳に執するを除いて本門久遠の三徳を見せしめるが故に『開目抄』と名づけ、四には、文上脱益の三徳に執するを除いて文底下種の三徳を見せしめるが故に『開目抄』と名づけるのであります。

このうち『開目抄』の題号の意は、まさしく第四の文上脱益の三徳に執するを除いて文底下種の三徳を見せしめることにあり、これが『開目抄』を著された目的であります。

以上『開目抄』御述作の興起ならびに大意、題号等について、『文段』に従ってあらあら申し上げましたが、続いてただいま拝読した御文について申し上げたいと思います。

初めに「詮^{せん}ずるところは天もすて給へ、諸難にもあえ、身命^{しんみょう}を期^ごとせん」と仰せであります。

この御文について、日寛上人は『文段』に、「法華の行者の心地を結示するなり。若し此の心地決^{けつじょう}定^{てい}せざれば、法華・經の行者に非^{あら}ざるなり」(御書文段一七八頁)

と仰せであります。すなわち、この御文以下は法華經の行者を顕す項の結文に当たり、法華經の行者の心地を結示されている、最も肝要の御文であります。

大聖人が「今、末法において妙法を弘通するためには、諸天が日蓮を捨てるならそれもよし。今日蓮には、ただ妙法を日本国に弘通することに命懸けでやり通すことの一^と事あるのみである。そのためには命に及ぶ難に値おうが何かあらん」との決意をお示しあそばされているのであります。まさしく、この御文は身命^{しんみょう}を賭^として妙法流布に生きる決意をお示しあそばされ、もって私どもの信心決^{けつじょう}定^{てい}を促しておられるのであります。よくよく拝すべきであります。

次に「身子が六十劫の菩薩の行を退せし、乞眼の婆羅門の責めを堪へざるゆへ。久遠大通の者の三五の塵をふる、悪知識に値ふゆへなり」と仰せであります。身子とは、釈尊十大弟子の一人で舍利弗のことです。

「乞眼の婆羅門」については『大智度論』に出てくる話で、舍利弗が昔、禪多羅仏という仏の末法において菩薩の修行をしていた時、次第に成仏の時期が近づいてきたのを第六天の魔王が見て、その成道^{さまた}を妨げようとして、婆羅門に姿を変えて舍利弗の所へ来て、眼を布施するように求めたのであります。

舍利弗は「今、自分は布施の行をしている最中であるから眼はやれないが、もし我が身および財産を望むならば与えよう」と言ったのであります。婆羅門は「汝の身や財産はいらない、どうしてもおまえの眼がほしい」と執拗に言うので、舍利弗はやむをえず、自分の片方の眼を抜いてその婆羅門に与えたのであります。ところが、婆羅門からは感謝の言葉さえなく、それどころか、その眼の臭いのを嫌って、唾をかけ、地に捨て、しかも足で踏みにじったのであります。それを見て舍利弗は、こんな人間を救うことはできないと怒って、今までの修行をやめてしまったのであります。

結局、長い間、菩薩の修行をしてきましたが、乞眼の婆羅門の所行に耐えられなかったために、今まで積んできた修行が役に立たず、また元の二乗に戻ってしまったという

話であります。

次に「久遠大通の者の三五の塵をふる、悪知識に値ふゆへなり」とは、久遠五百塵点劫の昔に成仏の種子を下された者、また三千塵点劫の昔、大通智勝仏の時に釈尊から成仏の種子を下された者のなかに、途中で退転して、インド出現の釈尊が霊鷲山で法華經を説かれるまで生死の世界に輪回していたのは、まさしく悪知識に値って法華經を捨てたためである、と仰せられているのであります。

ここで「悪知識」とは、人を悪に導く邪悪な者のことで、「知識」とは事物の認識を指すのではなく、友人・知人などの意であります。しかし、悪知識に値っても、それを奇貨として自己の信心を強盛にできるならば、それが善知識となり、提婆達多が釈尊にとって第一の善知識であると言われる所以もここにあるのであります。

次に「善に付け悪につけ法華經をすつるは地獄の業なるべし」と仰せであります、この御文は「善に付け悪につけ」すなわち、事情と理由のいかんを問わず、いかなることがあろうとも、舍利弗の如く、乞眼の婆羅門の仕打ちに耐えきれず退転するようであってはならないと仰せられているのであります。

すなわち、私どもの信心は、たとえいかなる理由があろうとも、それが善であっても悪であっても、法華經を捨てるようなことがあれば、一生成仏の道を断つことになり、墮地獄の業となるのでありますから、そのようなことは断じてしてはならないとの仰せであります。

例えば、戒壇の大御本尊への信仰を放棄した創価学会は、彼らがいかに言い繕うとも、この御制誡に反していることは明白であり、その罪はまことに深いのであります。しかし、その彼らを救えるのは我ら本宗の僧俗であることをよくよく銘記し、我々は一切衆生救済の大願に立って、万事を差し置いて破邪顕正の折伏を行じていかなければならないと存するのであります。

次に「大願を立てん。日本国の位をゆづらむ、法華經をすて、觀經等について後生を期ごせよ。父母の首を刎ねん、念仏申さずば、なんどの種々の大難出来すとも、智者に我が義やぶられずば用ひじとなり。其の外の大難、風の前の塵なるべし」と仰せであります、

「大願とは法華弘通なり」（御書一七四九頁）

と仰せの如く、一天四海本因妙広宣流布達成の大願を立てることのであります。

そのため、人あって、たとえ我れに対して、法華經を捨てて念仏の觀經等について後生を願うならば日本国の位を譲ろうとの、いわゆる世間的最高の名誉光栄をもって誘惑するも、また、もし念仏を称えなければ父母の首を刎ねるなどとの忍び難い最大の悲哀苦痛をもって脅迫するなどの種々の大難が降り掛かろうとも、我が教義・信条が智者によって破られないかぎり、微塵寸毫ばかりも、これらの誘惑・脅迫に従うことはできない。まして、そのほかの種々の大難などは風の前の塵の如くである、と仰せられているのであります。

日寛上人は、この御文について、

「『日本国の位を譲らむ』とたばかりは善につけてなり。『父母の頸をはねん』とおどすは悪につけてなり。是れ世間の極善・極悪を挙ぐるなり」（御書文段一七八頁）

と仰せられ、いかに世間の極善・極悪をもって信心退転を強要されようとも、けっして

退転しない強盛なる信心こそ肝要であると仰せられているのであります。

さらに、日寛上人は、

「一たび此の文を拝せば涙数々降る。後代の弟子等、当に心腑に染むべし」(同^〆)
と仰せられ、私どもの信心は善悪共に、いかなる迫害、脅迫や誘惑にも負けず、微動だにしない確固たる信仰姿勢を貫いていくことを心腑に染めることが最も大事であると御教示あそばされているのであります。

まさしくこの御指南を拝し、これからの広布への戦いにおいて、我らにたとえいかなる事態が起ころうが、強盛に題目を唱え、毅然として対応し、いよいよ破邪顕正の戦いを進めていくことが肝要と存するのであります。

次に「我日本の柱とならむ、我日本の眼目とならむ、我日本の大船とならむ等とちか
いし願やぶるべからず」と仰せであります。この御文は大聖人の主師親三徳を顕され、もって日本の主、日本の師、日本の親とならんと誓いを示されたものであります。

すなわち「日本の柱」とは主の徳、「日本の眼目」とは師の徳、「日本の大船」とは親の徳を顕されており、大聖人御自身の主師親の三徳を顕して、一切衆生を救おうという大願はけっして破ることはできないと、その御確信を仰せられているのであります。

そもそも、主師親の三徳とは『開目抄』の冒頭に、

「夫一切衆生の尊敬すべき者三つあり。所謂、主・師・親これなり」(御書五二三^〆)
と仰せのように、すべての人が尊敬すべきもので、日寛上人は『末法相應抄』に、
「三徳有縁を本尊と為すべし」(六卷抄一三六^〆)

と仰せられております。また、同じく『末法相應抄』に『報恩抄』の御文を挙げて、

「蓮祖自身の三徳を示して云わく『日蓮が慈悲廣大乃至日本国の一切衆生の盲目を開ける功德有り。無間地獄の道を塞ぎぬ』等云云。『慈悲』は父母なり、『盲目を開ける』は師なり、『道を塞ぎぬ』は主君なり、蓮祖の三徳分明なり、故に本尊と為すべし云云」(同一四九^〆)

と仰せられ、主師親三徳兼備の仏とは、すなわち末法御出現の宗祖日蓮大聖人であり、人法一箇の深意の上から、本尊となすべしと御指南あそばされているのであります。

よって、本抄の結文において「日蓮は日本国の諸人に主師父母なり」と示され、大聖人御自身こそ三徳兼備の仏であることを明かされているのであります。

なおまた、御文に「我日本の柱とならむ、我日本の眼目とならむ、我日本の大船とならむ」とあるところから、この御文をただ日本のみに限っての仰せであると拝するのではなく、この御文は広く閻浮提を指しておられるものと拝することが大事であります。

されば、末法御出現の宗祖日蓮大聖人を主師親三徳兼備の末法の御本仏と仰ぎ奉り、その御本仏が御図頭あそばされた本門戒壇の大御本尊を帰命依止の本尊と崇め奉り、至心に自行化他の信心に励むところ、必ず自他共の成仏を遂げることができるのであります。

今、宗門は、来たるべき平成三十三年・宗祖日蓮大聖人御聖誕八百年、法華講員八十万人体勢構築へ向かって、僧俗一致・異体同心して力強く前進しております。

この時に当たり、我らは一人ひとりが御本仏日蓮大聖人の弟子檀那として、確固たる信念と自覚を持って、為法為宗、力強く前進していくことが最も肝要と存じます。

皆様方のいよいよの信心倍増と御健勝をお祈り申し上げ、本日の法話といたします。

宗祖日蓮大聖人、『得受職人功德法門抄』にのたまわく、

「此の妙法蓮華經は本地甚深の奥蔵おうぞう、一大事因縁の大白法なり。化導三説に勝れ功一期いちごに高く、一切衆生をして現当の悉地成就しつちをせしむる法なるが故に、此の經受職の人は是くの如く功德を得るなり。釈に云はく『法妙なるが故に人貴し』等云云」（御書五九四頁）